ジュラーヴリ

ЖУРАВЛЬ

チェルノブイリ事故３５周年の集い
～フクシマ１０年と結んで～

2021年 ４月２４日（土）午後 2:00～４:30

大阪市立総合生涯学習センター（第１研修室）

＊プログラム＊

1. **＜基調報告・提案＞ チェルノブイリ３５年・フクシマ１０年に際して**
   ～チェルノブイリ・フクシマを繰り返させない
   原発事故被害者の補償・人権の確立に向けて～
   ＊国連人権理事会への意見書の提案
2. **東日本大震災・フクシマ事故10年～紙芝居で伝える体験と想い～**
   動く紙芝居（アニメ）「なみえ母娘避難物語　私は帰らない」 （DVD上映）
   なみえ物語つたえ隊　岡洋子さん・美里さん（母娘,ビデオ・メッセージ）
3. **＜歌＞ 故郷を想い歌う：アカリトバリ さん**
4. **チェルノブイリからのメッセージ**
5. **討論・アピール**

（資料代：800円、学生・避難者・障がい者：400円）

私たちは、昨年のヒロシマ・ナガサキ７５年に引き続き、今年、フクシマ事故１０年・チェルノブイリ事故３５年に際して、改めて「**フクシマを核時代の終わりの始まりに**」との思いを新たにしています。チェルノブイリ・フクシマを繰り返させてはなりません。そして、原発事故被害者の補償と人権の確立を求めて、被害者の方々とともに進んで行きたいと思います。その取り組みのひとつとして、チェルノブイリとフクシマの被害者と

ノボキャンプ/若い画家たち

ともに、原発事故被害者と連帯する世界の多くの人々の賛同も得て、「共同意見書」を９月の国連人権理事会（第４８回会合）に提出する予定です。集いでは、その「意見書」の提案と議論も行いたいと思います。

コロナ禍のため、残念ながらチェルノブイリやフクシマの被災地からのゲストをお迎えすることはできませんが、映像でメッセージを寄せて頂きます。フクシマからは、浪江町からの避難者で、震災と原発事故の体験を紙芝居で広く伝える活動をされている岡洋子さんと長女の美里さんのビデオ・メッセージ、母娘一緒に出演された紙芝居のDVDを上映し、震災・原発事故の体験と想いを共有したいと思います。ぜひ、ご参加ください！

東日本大震災・フクシマ事故10年〜紙芝居で伝える体験と想い〜
動く紙芝居（アニメ）「なみえ母娘避難物語　私は帰らない」

介護施設に勤務しはじめたばかりの娘は懸命にお年寄りの世話をし、救助を待っていた。慣れぬ仕事、重労働に娘は倒れる。命の危険が迫る中、施設長は娘を迎えに来るよう母に電話する。その横で「帰らない」と叫ぶ娘、修羅場だった。母は娘のそばにいる施設長に「私に代わって娘を抱きしめてほしい」と頼む。
（「東日本大震災１０周年事業　未来に伝えたい１０の物語　ふくしま絵うた本プロジェクト」による「なみえ母娘避難物語『私は帰らない』」の紹介文より）

関西初上映

今回「集い」にビデオ・メッセージを寄せて下さる岡洋子さん、美里さんは、浪江町から福島市に避難されています。東日本大震災当日は、たまたま家族で宮城県名取にいて被災し、翌日なんとか浪江に戻りました。当時、介護福祉士として町の介護老人福祉施設で働いていた長女の美里さんは、非番でしたがすぐに施設に駆けつけ、大勢のお年寄りに付き添い避難を始めて転々と移動…その時の母娘の体験をもとに作製された紙芝居が「なみえ母娘避難物語 私は帰らない」です。岡さん家族は、美里さんの帰りを待って３月１４日まで浪江の自宅に留まった後、福島市に避難しました。

洋子さんは、2014年から「浪江まち物語つたえ隊」に参加され、大震災と原発事故の被害の体験を、紙芝居を通じて発信されています。2017年には、同じく紙芝居アニメ「浪江消防団物語 無念」の上演と合わせて関西でも講演して頂きました。紙芝居アニメ「私は帰らない」の上映は、関西では今回が初めてです。

2021年2月14日　ドーンセンターにて

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」発足29周年の集い
～ヒロシマ・ナガサキ75年　ヒバクシャの思いをつなぐ～

参加報告　久保　きよ子

何とか無事に終えることができました。

昨年12月13日に予定していた「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」発足29周年の集いを新型コロナウイルス感染症拡大防止のための緊急事態宣言によって延期していましたが､2月14日､ようやく開催できました｡｢救援関西｣の発足集会であり､特に昨年は被爆75周年でもあったので是非開催したかった集いです。まだ緊急事態宣言が続いていたために、会場は定員の半分での使用許可、それで併せてオンライン（Zoom）開催も試みました。この初めての試みがうまく進んだのはひとえにTさんの活躍のおかげです。準備から当日のZoomによる配信まで、本当に頼りになる助っ人でした。

緊急事態宣言下で開く集会でしたので、会場では体温計・手の消毒・三密回避・換気などの感染予防対策を行いました。参加された皆さんのご協力で事を運ぶことができました。参加者はオンライン参加を含め46名でした。

前日の2月13日深夜、福島・宮城沖で震度6強の地震が発生しました。午後11時8分ごろ、福島県沖を震源とするマグニチュード（M）7.3の地震があり、最大震度6強を観測したのです。それも2011年3月の東日本大震災の余震とみられるというのです。大きな揺れのテレビ報道に驚き、福島の知人や友人の安否を心配しました。振津さんからのメール～福島の友人からのメールでは「揺れは10年前より強く感じたが、棚の物が落下した程度で、人的被害はない」～で一安心をしました。

集いでは、まず最初に、事務局から、「ヒロシマ・ナガサキ75年から、チェルノブイリ35年・フクシマ10年に向けて」の報告をしました。2020年の取り組みを振り返り、2021年に取り組む6項目の提案が述べられました。（詳細は、4ページの「事務局報告」を参照してください。）

次に、当会の代表山科和子さん（1922年1月27日生まれ、99才）の近況報告とDVD「ナガサキの証言 被爆者は語る」が上映され、改めて長崎被爆者としての山科さんの苦難の人生と、核と戦争に反対する強い思いを胸の中にしっかりと納めることができました。

続いて、 チェルノブイリとフクシマの友人からのビデオメッセージを紹介しました。何度も来日してもらったベラルーシのジャンナさんは、居住地のマリノフカの雪景色を見ながら彼女の言葉を聞いていたので、とても身近に感ずることができました。

ロシアのラディミチとパーベルさんのメッセージは、字幕がつけられていたので、とても分かりやすく良かったと思いました。

続いて、振津さんを交えてのフクシマの友人のメッセージ、事故から10年経ったが、事故の収束とはほど遠

く、いまだに難題は山積みの複雑さを感じ、私たちもまだまだ頑張らねばと思いました。

引き続き、福島出身のアカリトバリさんの澄み渡る歌声「青い空」は、頭の中に浮かぶ青い空が大きく大きく広がり､私たち参加者に､清い心を拡げてくれました｡是非ＣＤにして発売していただきたいものだと思いました。

最後に、この集いで印象に残った福島の佐藤龍彦さんのメッセージの一部を引用させてもらいます。

「峠三吉の原爆詩集を思い出す。
ちちをかえせ　ははをかえせ　としよりをかえせ　こどもをかえせ　わたしをかえせ
わたしにつながる　にんげんをかえせ・・・へいわをかえせ
『10 年』は闘いのスタートに過ぎない。多くの人々の連帯が、わたしたちの福島の運動の支えになってきたことを実感している。
共に生き続け、ともに　闘い続けましょう。」

【事務局報告（抜粋・短縮）】

ヒロシマ・ナガサキ 75 年から,
チェルノブイリ 35 年・フクシマ 10 年に向けて

「救援関西」は、昨年 2020 年１１月に「発足２９周年」を迎えました。長年にわたり一緒に活動し協力してきて下さった多くの方々に心から感謝申し上げます。

昨年 2020 年は、「ヒロシマ・ナガサキ被爆」から 75 年でした。ヒロシマ・ナガサキとチェルノブイリ・フクシマを結んで、ヒバクシャ＝核被害者とともに、これ以上の核被害を許さない、核の軍事利用の核兵器にも「平和利用」の原発・核燃料サイクルにも反対し、ヒバクシャの人権・補償の確立を求め、そして「核時代」の終わりをめざそうと取り組んできた私たちにとって、ヒロシマ･ナガサキの被爆者の方々の体験と運動に改めて学び、今後の取り組みに繋ぐ重要な節目でもありました。

この節目に、「救援関西」代表である長崎被爆者・山科和子さんのビデオ・メッセージを改めて皆さんと共に視聴し、その「思い」を改めて受け止め「チェルノブイリ 35 年・フクシマ 10 年」の取り組みにも繋いでいきたいと、「発足２９周年の集い」を計画しました。

≪2020 年の取り組みを振り返る～コロナ禍で迎えた「被爆７５周年」≫

コロナ禍の中で、活動計画の断念・延期を次々と余儀なくされた

2020 年は「コロナ禍」のために、３月に計画していた「チェルノブイリ・フクシマ若者訪問交流」をはじめ、2019 年末の「発足２８周年の集い」で提案した活動計画を、次々と断念せざるを得ない状況に追い込まれました。(事故３４周年の集いも延期・中止。関電申し入れ行動もできず。) そして 2021 年春に行おうと提案した「フクシマ１０年・チェルノブイリ３５年」の「第二回国際シンポジウム」に向けた実行委員会の立ち上げも、チェルノブイリ被災者のゲストの渡航禁止解除のメドも立たない中で、大幅な延期を余儀なくされています。私たちは「コロナ禍」の下でも「やれること」に取り組み、「ポスト・コロナ」の運動に繋いでいきたいと努力してき

ました。

ヒロシマ・ナガサキ被爆７５年に～改めて被爆者の体験と運動に学ぶ、ヒバクシャとの連帯

オンラインで開催された原水禁大会・分科会に協力して「ヒバクシャの体験と運動を継承し、チェルノブイリとフクシマをつなぐ」「被爆７５年、チェルノブイリ・ヒバクシャのメッセージ」のスライド・ショー作成などに取り組みました。ジャンナさんがメッセージで訴えた「核兵器でも、原発でも、これ以上、人々の健康や生活を脅かすことがあってはなりません。」「私たちは、それぞれ違う国で暮らしていても、連帯を深め、いかなる核被害も許さないために力を合わせて闘いましょう。核のない、安全な世界を実現しましょう。」との思いは、私たちと同じです。ヒロシマ・ナガサキ７５年から、フクシマ１０年・チェルノブイリ３５年に向け、ヒバクシャ＝核被害者と繋がって進んでゆくことを、改めて確認し合いました。（詳細は「ジュラーヴリ」122 号）

チェルノブイリとの交流の継続～コロナ禍でも、「揺るぎない絆」が繋がっている

現地訪問はできませんでしたが、チェルノブイリ・ヒバクシャと、メイルなどを通じた情報交換と交流を継続することができるようになり、ベラルーシやロシアの友人たちの日常の様子が、より身近に感じられるようにもなりました。コロナ禍でも、絆が繋がっていることを実感し、これまで２９年の継続した交流で築いてきた「揺るぎない絆」を改めて確認しました。

フクシマとの連帯・交流

チェルノブイリ若者交流訪問は延期となりましたが、福島と関西の学生と共に行った、「訪問事前学習」の福島被災地視察（2020 年１月）では、帰還困難区域を避難者の方の案内で訪問し、帰りたくても帰れない、故郷を取り戻したいという思いなどを聞きました。また、未だ「本格操業」に至らない中での漁師さんの思いもお聞きしました。そして、「これ以上海を放射能で汚すな」という漁師さん（新地町・釣師浜の小野春雄さん）の思いを聞き取った「ジュラーヴリ」の記事は、その後の「トリチウム汚染水海洋放出反対」の取り組みにも活かすことができました。

トリチウム汚染水海洋放出反対に、福島県と全国の運動と共に取り組みました。「原発のない福島を！県民大集会」実行委員会の呼び掛けた署名への協力、英文・国際署名作成、トリチウム汚染水海洋放出反対と医療費無料化の継続の政府交渉に、呼びかけ８団体の一つとして協力して取り組みました。また、これまで私たちと繋がりのあった福島の皆さんの思いを「フクシマ１０年」を機会に改めてお聞きし、広く伝えたいと、ビデオメッセージの試みも始めました。

ヒロシマ・ナガサキ、チェルノブイリ・フクシマを繰り返させないための取り組み

「戦争はいやや！核なんかいらへん！フェスティバル」（反核フェス）の実行委員会に参加し、開催に向け多くの皆さんと協力しました。また「さよなら原発 関西アクション」にも参加するなど、*脱原発の様々な行動に参加*しました。

核不拡散条約（NPT）「発効５０年」「無期限延長２５年」の節目の NPT 再検討会議は、コロナ禍のために５月開催予定の延期を余儀なくされました。私たちは、NPT 参加 NGO が、核兵器廃絶を求める世界の市民運動として発した「共同声明」に賛同しました。さらに１２月には、５０カ国が「核兵器禁止条約」を批准し、今年１月２２日に同条約が発効し、廃絶に向け新たな一歩を踏み出しました。私たちは、日本政府に対して「核兵器禁止条約への署名・批准、非核三原則法制化」を求める署名（非核・平和のひろば呼びかけ）にも取り組むなど、

核兵器禁止・廃絶を求める国内外の運動と連帯して取り組みました。

毎月の運営会議とジュラーヴリ発行

毎月欠かさず行っている運営会議では、情報交換や様々な取り組みを進めるための話し合いを行なっています。また、「ミニ学習会」を持ち、NPT 参加 NGO「共同声明」と核軍縮をめぐる歴史的経緯、「黒い雨」被爆者裁判の広島地裁勝訴の意義、等についても議論しました。

また、ジュラーヴリを３回発行しました（120 号・２月、121 号・５月、122 号・１０月）。

≪2021 年の取り組みの提案≫

～コロナ後を見据えて～「フクシマ１０年・チェルノブイリ３５年」に取り組む

（1）　チェルノブイリとフクシマ支援・交流～チェルノブイリとフクシマをつなぐ活動

（2）チェルノブイリとフクシマの現状を知らせる活動

（3）フクシマ事故被害者の保障・補償などを求め、被害者へのさらなるヒバクの押しつけに反対する取り組み（８団体等と協力した対政府交渉など）

（4）脱原発、核兵器禁止、等、の取り組みにも、国内外の諸団体と協力して取り組む。

（5）「フクシマ１０年・チェルノブイリ３５年」の取り組み～「コロナ後」2022 年にかけて

① チェルノブイリとフクシマを結ぶ「第二回・国際シンポジウム」の開催

「チェルノブイリ・フクシマを繰り返すな、原発事故被害者の補償と人権の確立、フクシマを核時代の終わりの始まりに」を掲げ、フクシマとチェルノブイリの被害者が直接参加する「フクシマ５周年・チェルノブイリ 30 年」に続く「第二回・国際シンポ」を、関西と福島で開催することをめざす。１年遅れの 2022 年春開催をめざして準備したい。

② 「フクシマ１０年・チェルノブイリ３５年」に際しての「救援関西」の取り組み：

1. 2021 年４月２４日（土）「チェルノブイリ３５周年の集い～フクシマ１０年と結んで」
2. 国連人権理事会へ チェルノブイリ・フクシマのヒバクシャとの共同声明の提出：

   ９月の国連人権理事会へ提出する案を作成し、国内外で賛同を募って国連人権理事会に提出し、国際的にアピールする。国内外に原発事故被害者の人権と補償の問題をアピールする「文書」として活用する。また、今後の国内外での被害者支援や反核運動にも繋げ、来年の国際シンポなどの取組みにつなげられるものにする。（４月の集会で呼びかけをスタートできるように。）

③ 2022 年の日本の人権問題に関する「普遍的・定期的レビュー」（UPR）に際して、フクシマの事故被害者の人権侵害を訴える「意見書」を「救援関西」として提出（2022 年３月末）する準備を、フクシマの被害者の方々とも議論しながら進める。国内で賛同団体を募る。

（6）「救援関西」３０周年：2021 年１２月。３０年間の活動を振りかえる。「コロナ後」の交流・支援など、次の世代に受け継いでいける活動を提起し、「４０周年」を目指す。

【長崎被爆者・山科和子さんの思い】

山科和子さんは、原爆で両親・弟妹を失い自らも大病を患い、被爆者に対する差別も受けながらも、「戦争も原爆も、繰り返してはならない」と５０年以上にわたって、自らの苦しい辛い被爆体験・戦争体験を語り反核平和の活動を続けてこられました。また被爆者団体協議会（被団協）の役員として、国家補償に基づく被爆者援護法を求めるなどの

活動にも取り組んでこられました。

今年（2021年）1月22日、「核兵器禁止条約」が発効し、被爆者の悲願である核兵器廃絶への新たな一歩を踏み出しました。この条約は国際人道・人権法の立場からも、核兵器の開発から使用まで、威嚇も含めて禁止する国際法です。また核兵器の使用や実験による被害者への援助、汚染された環境の回復も含まれています。しかし唯一の戦争被爆国である日本政府は、アメリカの「核の傘」のもとに核兵器保有国と非保有国の「橋渡し役」を口実にこの条約を署名・批准しようとしていません。政府にこの核兵器禁止条約の署名・批准を迫るために「核兵器禁止条約への署名・批准と非核三原則の法制化」の署名に、これからも協力していきたいと思います。

2009年、2010年の「救援関西」の集いで、山科さんに被爆体験、語り継ぐ「原動力」、戦争も核もない世界への強い思いなどを語っていただきました。その思いを改めて振り返り、「核なき世界」への思いを共有したいと思います。（以下、一部抜粋です。）

語り継ぐのが私の使命

長崎被爆者 山科和子

～アメリカの実験だった原爆投下～

その頃長崎市内におりました。丁度爆心地になる山里町。実は北九州市にある小倉に落とすつもりできたのが雲が低くて見えなかったので、司令を仰いで、第二目標の長崎に行って、長崎で雲間からチラッと家が見えた所にここぞと思って落としたのが、長崎の中心地から２キロメートル以上離れた郊外だったわけです。そしてその飛行機は急旋回して長崎を離れ、その頃は沖縄はもうアメリカ軍の手に入っていましたので、沖縄で給油してそしてテニアン島に帰って行ったそうです。だから広島は２０万人の人が亡くなり、長崎は１０万人の人という事は、郊外に落としたためと、その頃は皆お勤めに出ており、住んでいる人は少なかったという事で、死者は少ないんです。被害は今の長崎にしても、どこに原爆が落ちたんだろうと分からないような所ですけど、でも皆さん御承知のとおり、長崎原爆の方がきつかったんです。私は１９８２年にアメリカに行って来ました。その頃まだ３つしか原爆が作ってなくて、１つはニューメキシコ州のアラモゴードで実験を行い、そして１つは広島に落とし、１つは長崎に落としたんです。だからアメリカのいい実験になった訳なんです。

～爆心地で探し続け・・原爆で両親・弟妹を失って～

私は弟と妹が４人いますが、一人の弟は海軍の学校に行っており、一番下の妹は小学５年生で学童疎開しておりましたので、その二人は助かりました。

死んだ弟は長崎のまだ中学生でした。妹は奈良の学校に行って寮生活をしており、８月の夏休みで、長崎に５日に帰ってきて９日に死んだんです。父は家の焼け跡で真っ黒になって倒れていました。もう目の玉もありません。頬の肉もありません。そしてお腹の肉もありません。仰向けに倒れ標本室にある骸骨そのものです。母はうつ伏せになってお尻の骨はボロボロでした。長崎医大の生き残られた偉い先生が、私のような生き残った者が集まった時に「長崎市内は空襲を受けていないから助かっている。焼けたここは大丈夫だ。長崎市内に帰るよりここにいる方が安全だよ。」と言われました。放射能の事はまだ全然分かっていない時ですから、私はその先生と一緒にその爆心地に残って、死んだ弟と妹の死骸を探していました。

当時、あの放射能の恐ろしさというのは全然分かっていませんでした。あの偉い先生方も。それで私は爆心地にそのまま居て探しましたけど、弟と妹もどうしても分からないまま１０日経ちました。食べる物も何もありません。地べたに寝て川の水を飲みました。ウジ虫が湧いて皮膚を噛みます。１０日も経つと、夏も８月なので、臭い臭いあの臭さは忘れられません。

そして長崎駅に行って父の死を告げ時、駅員さんは「あんたの顔色は生きている人の顔色じゃない。早く長崎を出なさい。明日の晩に門司港行きの夜行列車が出るからそれに乗りなさい。」と言うてくれました。その一言

で私の今日があると思うんです。本当にあの時あのように言われなかったら、まだ長崎に残っていました。それで私は焼け跡に帰って父と母のお骨だけ拾ってその晩に出ました。あの頃の日本人は本当に一生懸命で、ズタズタになった線路の石一つ一つを捨てて線路を作って、門司港まで列車を走らせたんです。

それから長崎を出て母方の祖母がおりました行橋に行って一晩かせてもらって、行橋の駅長さんに父の死を告げた時も「早く病院に行きなさい。」と言われて博多にあった九州帝国大学付属病院行きました。１か月位入院しました。けど九大では「あなたに飲ませる薬はない。食糧もない。早く退院して田舎で暮らしなさい。」と言われてそれで熱も下がったので、また帰りまして別府の温泉に家を借りてそこにいました。

―一人、門司で働くも―

門司のJTBに一人転勤していました。アメリカ軍が上陸してくるでしょう。それでカウンターで応対するのは私なんです。というのはその頃英語とかフランス語は敵性語として学校で教えていませんでした。それで長崎で私は英文科にいたので、英語で応対してました。そしたらどう調べたか分かりませんが、夜に「ハロー」と言って下宿にやって来るんです。それで「あんたがおるとハローが来るから。」と下宿は追い出されるし、それからJTBも海外からの引揚者はどんどん来るし、私はＪＴＢも追い出されてしまったんです。私のような人間だから水商売もできないからもう本当に・・・。大人ばっかりですから言いますけどね、血を吐いたり膿が出たり身体がそうでしょう。そして町医者に行くと「君のお父さんはよく遊んだんだね。親の因果子に報いとはこのこっちゃ。」とその辺に人が聞いているのに聞えよがしに言うんです。どれ程辛かったか・・・。それで九州を出ました。

～「原爆のことを語るのが使命」森滝先生の言葉に支えられ～

神戸に行ってもう一回学校に行き、２年間勉強しなおして学校の教師になったんです。１８年経ってから体中が真っ黒になって、丁度焼け跡に転がっていた死体同様になりました。神戸医大の尼崎分院に入院しました。先生は、私が痛い、痒い、熱があるというので、熱さましを飲ませたり、痒いというので顔に薬を塗ってくれますと、それに反発して真っ赤に腫れて血膿が出るようになりました。あんな病気したから学校も辞めさせられて･･･。

それで２０年経って大阪に出てきて、頼るところがないから原水禁に行っていろいろ話をした時に和田長久さんとお知り合いになりました。そしてそれから私は日本で受け入れてもらえないならと思って、外国に行って原爆の話をするようになりました。

何度も死を告げられました。ここまで生き延びてこられたのも、アメリカで国連広場からセントラルパークまで平和行進した時に、森滝先生に「山科さん、死んでも当たり前の光線を生き抜いたんだから、原爆の事を後世に語るのが貴方の使命だよ。これまで生きてきたあんたの運命を神様が支えて下さったのだから。」と言われて、その言葉を受けて、私はずっと話をするようにしています。それで私は２２カ国で原爆の事を話し、国際会議にも出て、そして地域の学校に行っても放射能の悲惨さを話しています。年間２７校まわって原爆の話をするようにしています。そういう生活をいまだにしています。私が生き延びたのも皆さんのおかげ、皆さんの力添えで本当にありがたいと思います。

～米寿を迎えても語り続ける原動力と今も続く差別～

（語り続ける原動力は）一人生き残った私ですから、やはり森滝滝先生が言われたように生き残った者の被爆者としての使命です。

これは子供がおったり、孫がおったりしたらいまだに被爆者ということは言えないんですよ。何でなんでしょうね。私たち被爆者というと差別があるんですよ、いまだに・・・。私は東住吉の会長として被団協の理事として健診等に立ち会って、それから生活指導員として被爆者の家をまわっています。いまだに差別があります。

当時、被爆者は「恋をするな、結婚するな、子どもを産むな」とまで言われたんです。正直それを守ったのは私なんです。いまだに被爆二世・被爆三世と分かれば、いろんな差別、結婚差別があります。私は今被団協の理事をやっておりますし、東住吉の会長もしてます。今度６月に被爆者健診があります。府庁の方はお金がありま

すから案内が封筒で来ますけど、私どもの会ではお金が無いので、ハガキで「折鶴の会」山科和子の個人名で、健診の案内を出します。府庁からは健診の場所を１カ所しか教えてくれないので、３カ所での場所を書き、自分の都合のいい日に来て下さいと。そのかわり原爆のゲの字も出しません。被爆手帳を持ってきて下さいという事も書きません。被爆手帳がないと健診が受けられませんけど、それも書きません。私個人の名前で、ご自分の為ですから健診を受けて下さいという事を書きますけど。普通のお家でポストに入って分からなかったらいいけど、マンションなんかの共同の郵便受けに入りますと「あの人は被爆者かいな、あの人は被爆二世かいな」と。いまだにそういう事があります。

私は長居公園で「戦争はいやや、核なんかいらへん」という反核フェステバルの代表をしています。アメリカに８２年に行って帰ってから、日本でも何か大きな仕事をしようと思って、長居公園で２５年間続けております。反核フェステバルでも、私のテントは原爆のゲの字も書いてはおりません。「折鶴の会」という名で出しております。被爆者のパンフレット・パネルそういうものは教職員組合の先生方が中央に貼ってくださって、私のテントは被爆者ということが分かると困る事があるので出しておりません。

反核フェスティバル
(2019 年)

一生消えないでしょうね、被爆者の名は・・・。学校に行った時、子どもらはようお話を聞いてくれましてね。その後私が最後に一人一人握手して帰るんですよ。そしたらね、「おばあちゃんと握手したら放射能が僕に移る。」と言う子もいましたね。

～最初はアメリカ憎しだったが・・苦しみは同じ～

私はこの被爆体験を森滝先生が仰ったように「後世に残すのが私の使命」だと思っているんです。これは余談ですが、一番最初にアメリカに行った時は本当にアメリカ憎しと思って親の仇やと思って行きました。飛行機からサンフランシスコに降りてそれから国内線に乗り換えた時、アメリカの土地を踏みにじってやりましたよ。そして真珠湾に行った時、私たちが平和行進で歩いていたら、向こうでおばさんみたいな人が私たち日本人の姿を見て「ジャップ、ゴー、ホーム」と言ってほうきを持って私たちを追いかけてきたんです。「なんでやねん、私はアメリカが憎いんや。アメリカに殺されたんや。原爆症に苦しんでこんなに苦しい思いをしてきたのに」と言い返した時に、ある人が「あの人は息子さんを、日本が真珠湾で不意打ちをかけてそれで亡くしたのでアメリカの奥地から出てきて息子さんの菩提を弔っている。だからそいう行動に出たんです。」と言って説明してくれました。その時「ああ、日本人もアメリカ人も同じだな。」と思いました。

でもはっきり言って色々な事を言われることがあります。夜は枕を濡らす事もあります。でも必ず朝が来る、明るい朝が来るんだと思って、涙で濡れても翌日はケロッとしています。

それからもう一つ余談ですけど、おじいちゃんは武士の家柄でしたので「愚痴を言うな、泣き言を言うな、言い訳するな。」ともう本当に厳しく言われました。原爆後本当に苦しいし、お金もなかって食べる物もなかって、いまだに野の物を採って食べる事がありますけど、そういう生活をしていても泣き言を人に言わなかったんです。何も言いませんでした。

～チェルノブイリの子どもたちにも被爆体験を語り伝えたい～

だから私は私の被爆体験をチェルノブイリの子どもたちに何とかして伝えたいと思っています。もう放射能に負けないで。身体の中に入っている放射能はどうしても出ていってくれません。私も 63 年前の放射能を持っています。でもそれに打ち勝っていくのが生き残った者の使命だと思うのでそれに負けないようにしてほしい。私がチェルノブイリに行きました時に「おばあちゃんはどうしてそんなに元気なの？僕は入院待ち。」その子は入院待ちでお薬もない時でした。だから入院待ちしていて甲状腺が腫れあがっていたんです。「どうしておばあちゃんは被爆者なのにそんなに元気があるの？日本から遠く来たのに。」そんな風に言うてくれました。背中を撫でて、そして「おばあちゃんみたいに元気になるのよ、あなたも。お医者さんが診てくれるのよ。お薬も飲みな

さいよ。」言うて、いろいろ言い聞かせました。チェルノブイリの方々にも私の被爆体験を語り伝えて、あの子どもたちが元気で過ごしていくように、そして差別のないチェルノブイリができるように、ヒバクの先輩としていろんな事を語り伝えていきたいというのが私の今の願いです。

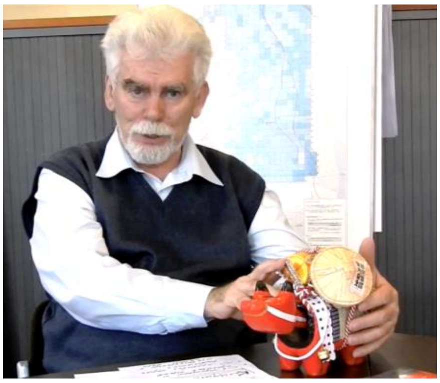
～是非言いたいこと～

私は代表として長居公園で反核フェス「戦争はいやや、核なんかいらへん」という表題で23年間続けています。「被爆国日本」という事を忘れないで、原子力発電所の事故もありますしなんやかや色々な事があるので「被爆国日本」を忘れないで。海外派兵とか色々な問題が山積してますけど必ず世界でただ一つの「被爆国日本」という事を政治家の方々も皆さんも心の中に含めてもらいたい。63年経って年老いてきましたから被爆者の数も少なくなりました。語る人間も数えるほどしかおりません。でも、「被爆国日本」は永久に消えないと思いますので、それだけはお心に留めていただきたいと思います。

日本の原発にも反対する、日本を核のない美しい新しい時代にできますようにお祈りして、今日のお話を終わらさせていただきます。有難うございました。

【チェルノブリ被害者からのメッセージ】

〔パーベルさん～核の被害者支援のための連帯〕



ロシア・ノボジプコフのパーベル・ブドビチェンコさんから、発足29周年にむけてのビデオメッセージをいただきました。パーベルさんは、ゆったりと腰かけて、福島土産の赤べこ（笑）を時々見ながら、ふわふわの白いひげと眉毛の中の目が、遠くを見たり、(カメラの中の)私たちを見たりしました。過去と未来、ノボジプコフと福島に思いを巡らしながら。

≪発足29周年おめでとうございます≫

日本の友人の皆さん！本日は救援関西発足の集いに「ラデイミチ　チェルノブイリの子どもたちのために」を代表してご挨拶申し上げます。

日本の皆さん、とりわけ救援関西の皆さんのおかげで、私は、日本のことをよく理解できるようになりました。救援関西の皆さんが、まず、私を日本に招いてくれたのです。私たちのNGOを代表して、このロシアの辺境の地ノボジプコフから、日本を初めて訪問したのは、フクシマ事故からまだ1か月しかたっていない時でした。私は、皆さんの国に行き、その美しさを楽しみました。

≪心温まる思い≫

福島からの訪問団と（2018年）

私は、子どものころからずっと、日本はとても遠い国と思っていたのですが、日本で数日過ごすうちに、私たちと日本の皆さんは、よく似ているなと思うようになりました。また地理的には、ロシアのウラジオストクから日本はそれほど遠いわけではありません。それに、日本人もロシア人も同じように勤勉でよく働く人々です。同じように人と関わるのが好きです。同じように昼間の仕事を終えて、夜には集まってカフェで憩うことを心待ちにしています。日本人が身近に感じられたのです。日本人ほどロシア人に近い

人々はいないのではないかと感じるほど。それはとても興味深い発見でした。まさに心温まる思いがしました。

それから、皆さんのことを思い出すことが多くなりました。子どもたちから送られた折り鶴を眺めて。また、この福島の民芸品（赤べこ）を見ると、皆さんのこと、福島のことを思い出させてくれるのです。福島に皆さんと訪れた事を思い出します。

≪懸け橋になろう≫

私たち「ラデイミチ」と「救援関西」は、ともにしっかりした土台を築いてきたと思います。協力・連帯・相互理解・相互支援、」そして友情のための強固な土台です。長年にわたって私たちは、大切な関係を築いてきました。決して失ってはならないものを。どんな政治的事件がおころうとも、私たちは橋をかけなければなりません。人間の橋です。橋の一方の脚は日本の救援関西の皆さん、もう一方はロシアの私たちのラデイミチです。これら二つの支柱と友情は、両国の友情の懸け橋となるものです。

本日は救援関西の発足をお祝いされているかと思いますが。親愛なる皆さん、皆さん一人一人に対しても、皆さんだけでなく、その親しい方々にも、その健康を心から願います。そして、前向きな気持ちを持ち、将来世代のために、よりよい未来を目指し、協力して創造的な活動を続けましょう。私たちはいつも皆さんと共にあります。ではまた…。

≪是非ラデイミチにいらしてください≫

追伸、そしてもう一つ。

コロナ禍もそろそろ収束するでしょう。そして、私の夢も叶うでしょう。皆さんのグループの活動的なメンバーが、私たちのノボジプコフのラデイミチを訪問してくれる事を願っています。どうぞ、是非いらしてください。

私たちは共通の悲劇、ヒロシマ・ナガサキの被爆、そしてチェルノブイリと福島の原発事故によって出会いことになりました。そしてこのような悲劇が私たちの連帯を促したのです。目に見えないが、全ての生き物に被害を与える「危険な敵」との闘いにおいて、被害者を支援するための連帯です。

パーベル・ブドビチェンコ

〈ラディミチの活動〉

新しいメンバーの参加やスタッフの育成が順調に行われているのがうらやましい限り！

障がい者リハビリセンター

リーダーの育成

マスターコース（料理教室）

独居高齢者支援

チェルノブイリ情報センター

〔ジャンナさんからのメッセージ〕

*ベラルーシのミンスク近郊マリノフカで暮らす「移住者の会」代表のジャンナさんからは、**①心のこもった連帯の挨拶、　②現在のベラルーシの苦しい実情を伝えるお手紙、　③2月14日集会に向けてメッセージ、**を頂きました。*

①核の惨劇が、世界中のどこでも、決して、繰り返されないために！

≪日本の友人の皆さん≫

「救援関西」発足２９周年、おめでとうございます。２９歳というのは、まだまだ若いですね。

しかし、皆さんは、沢山の人々の役に立つ素晴らしい活動をされてきました。

チェルノブイリ事故被害を受けた家族、マリノフカの「移住者の会」のメンバーは、「救援関西」の全ての会員の長年にわたる協力と支援にとても感謝しています。そして、この交流が今もずっと続いていることを本当に嬉しく思っています。

マリノフカの「移住者の会」も、皆さんと同じく1991年に発足したので、今年で２９歳です。

ですから、日本の皆さんもベラルーシの私たちも全員で、ともに「２９歳の誕生日」を祝いましょう！

≪チェルノブイリ事故・闘い・移住・支援≫

私たちは、政府に対して長い間、放射能汚染のない地域で家族や子ども達とともに暮らす権利を求め続けました。たいへんな闘いでした。

そしてやっと、チェルノブイリ事故から５年後の1991年7月に政府は汚染地域からの住民の移住を開始し、多くの人々が故郷を後にしました。このミンスクだけでも１万人が移住してきたのです。

住み慣れた土地から離れ、仕事も地域のつながりも失ったチェルノブイリ被災地の移住者の多くは、新たな土地で生活するために支援が必要でした。

「救援関西」の皆さんからの支援は、真っ先に私たちに届けられた支援のひとつでした。衣類や食料の支援が届けられ、特に粉ミルクやベビーフードなど乳幼児への支援は助かりました。

本当にありがとうございました。

≪パンデミック≫

2020 年は新型コロナウイルスのパンデミックのために、私たち全員が大きな影響を受け、地球上の異なった場所、違う国にいても、新たな条件の下で生活し、仕事をしなければならなくなりました。

全ての集会、全ての計画が、中止となりました。一年も前からずっと楽しみにしていた出会い、ベラルーシに若い訪問団が来られる計画もお流れになりました。とても悲しいことです。でも、次の新たな出会いを心待ちにしましょう。その時は大きな喜びとともに皆さんを迎えることができるでしょう。

≪ベラルーシの生活≫

ベラルーシでは、１１月から人々にマスク着用を義務づける施策が導入されました。

感染拡大の中で、人々は困難な時期を乗り越えるためにできる限りのことをして互いに助け合っています。家族や隣人にマスクを縫ってあげたり、自家製の保存食を作ったり、必要な人々に薬や食料を届けたりしています。

ベラルーシでも、民間商店の宅配（マリノフカでは、以前から私たちは利用しています）がより一層整備されています。パン、野菜、果物、ミルク、肉、衛生用品や、その他何でも注文すれば配達されます。

私は、ほんとうに、ほんとうに、パンデミックのこの状況が完全に終息することを願っています。病気に罹ることを心配せずに、皆が話し合うことができ、出会いを持ち、計画したイベントを行うことができるようになる

ことを切に願っています。

≪ヒロシマ・ナガサキ：ヒバクシャの共通の願い≫

さて、2020 年ヒロシマ・ナガサキの原爆投下７５年を経て、2021 年は、チェルノブイリの重大事故から３５年、そしてフクシマ事故から１０年です。これらの悲劇の体験者はますます数少なくなっていきます。

今の若い世代、私たちの子や孫たちの世代は、1945 年、1986 年、そして 2011 年に何が起こったのかを知らなければなりません。原子力は、軍事目的であれ「平和」目的であれ、生命と生活への脅威だということを知るべきです。核の悲劇が繰返されないように、一世代で忘却してしまうようなことがあってはならないのです。軽率な人間の行為、セシウム、ストロンチウム、プルトニウム等々による壊滅的な結果を人々に思い起こさせることは、これらの出来事の「証人」である私たちの義務です。残念なことに、ヒロシマ・ナガサキでは、証言のできる被爆者の方々が年々少なくなっています。私たちは、どんなに辛くても、自分たちのこの苦い体験を語り、伝えなければなりません。人々が強制的に放射能のせいで涙を流しながら自分の故郷や我家を永遠に後にしなければならないようなことが決してないように。子どもたちの健康が放射能のために奪われたことを、お母さんたちが悲しまなくてすむように。

≪核被害者の連帯≫

様々な国々の人々が、安全で、核のない世界の実現に向けて協力することがとても重要です。

そして、核被害者を支援し、核被害者の権利を守るために連帯しなければなりません。

このような地球的規模の放射能災害によって、核被害者とその家族がどんな体験をしたのかを証言し、また、その証言に耳を傾けることは、核の惨劇が世界中のどこにも、決して繰返されないために、ほんとうに大切なことです。私たちは、これからも多くの活動をしなければなりません。

山科さんからジャンナさんへ折り鶴を（2016 年）

ともに健康に気をつけ、前向きに希望的な結果に向けて、私たちの協力関係を続けていきましょう。私たちの長年にわたる友情と協力関係に対して、かつみさん、マーシャさん（雅子さん）、山科さん、そして日本の全ての友人の皆さんに感謝します。

心からの感謝をこめて　ジャンナ・フィロメンコ

②希望は…前方にあります

ジャンナさんは、メッセージに添えて、木々の葉が散り雪が積もったこと、感染を避けるため障がいのある息子さんと寒いダーチャに滞在したこと、大きな声では言えないベラルーシの実情など、私信として近況を教えてくださいました。

≪日本でも報道されている政情≫

ベラルーシでは不安定な状況が続いています。毎週土曜日、日曜日には、人々は平和的抗議行動に出かけ続けています。それ以外の日にも、様々な行動がなされています。先日は数百人が逮捕されました。平和的に抗議をした人々に、多額の罰金が課せられ、拘置所に１０日以上も拘留されます。８月９日には、不正な選挙と警察の暴力に平和的抗議をした約３万人の人々が拘束されました。

私も多くを書くことはできません。抗議のシンボルの白・赤・白の旗をアパートの窓に掛けているだけでも、見つけられたら罰せられます。

≪ベラルーシ初の原発稼働≫

11 月 7 日革命記念日、この日は国の祝日です。なのに、2020 年 11 月 7 日、ベラルーシ初の原発が稼働しました。しかし、3日目には何らかの機械のトラブルで原発は停止しました。情報はほとんどありません。今後どうなるかも分かりません。本当に心配です。

リトアニア、ラトビア、ポーランド、エストニアは、ベラルーシの原発の電気の購入を拒否しています。

≪そして、コロナ≫

新型コロナについては、報道でご存じのように、昨年ほとんど対策が取られることなく感染者が増え、今はミンスクのいくつかの病院は、コロナの患者治療用に変えられました。産科病院の一つさえも転用されてしまいました。移住者の中にも感染者が出て、重症者もいるそうです。学校は通常通り授業が行われ、大学ではある程度遠隔授業が行われています。医科大学では、病院実習が行われています。

そして、医師が不足しています。医師たちも、平和的抗議に参加し、多くが拘留され多額の罰金を課せられています。医者を辞める人もいます。

私は、人混みを避けてパーベルと一緒に長い期間ダーチャにいました。私はパーベルがコロナに感染しないかとても心配しています。最近、２２歳の若い学生が亡くなりました。パーベルは持病のてんかん発作が始まりました。発作が出ると私はどうしようもありません。小学生の孫も、学校でコロナに感染しましたが、クラスは隔離もされませんでした。私は、パーベルの散髪の仕方を習得しました。パーベルを散髪屋に連れていくのに外出しなくて済むように。

「ベラルーシでのこの状態の全てのために、私の神経は、すっと麻痺状態に陥っています」

私が知っている福島の方々、関西の皆さんに、くれぐれもよろしくお伝え下さい。

支援の言葉をありがとう。チェルノブイリ事故の時と同じく、皆さんは私たちを誠実な言葉でサポートしてくれています。

希望は…前方にあります。

③延期して開催された２月 14 日の「集い」に改めてジャンナさんより寄せられた手紙

親愛なる救援関西スタッフのみなさん、そして日本の友人の皆さん、こんにちは。

≪救援関西発足の集い≫に参加された皆さんに、盛会をお祈りするとともに、ご挨拶させていただきます。

まず、皆さんとの長きにわたる友情、そしてチェルノブイリ被災者へのご協力にお礼申し上げます。
昨年は、様々な出来ごと～悲しいことだけではなく、嬉しいことも～がありました。日本の皆さまの心からのご支援、人道的な連帯、そして相互理解に感謝いたします。

仮設住宅（佐藤さん宅）にお邪魔して（2016 年）

何度かの日本訪問の際に、私は故郷ベラルーシから遠く離れた国で自分が「よそ者」であると感じたことは１度もありませんでした。日本の皆さんがいつも私が快適に過ごせるようにご配慮くださったおかげです。

滞在中に何回か地震が起きた時、すぐに「怖くありませんか？」と聞いてくださいました。私はその時怖くはありませんでした。そして「いつもあなた方が側にいてくださいますから」と答えました。

日本で講演をする機会が数回あり、チェルノブイリ事故についてお話ししなければなりませんでした。その都度、思い

出すのが苦痛な記憶が私の心、そして魂を通じてよみがえってきました。しかし、皆さんがしっかりと支え、優しく気遣ってくださったおかげで、勇気づけられ役目を果たすことができました。核のない安全な世界を実現するために、私に出来ることは何でもして、これからも、チェルノブイリ被災者の悲しい経験を語っていこうと思います。安全な世界、放射能汚染のない世界、そして生家や故郷が永遠に失われることがない世界のために、若い世代に向けて自分の経験や知識を伝える私たちの活動を続けていきます。

いわき/古滝屋さんにて（2016年）

この一年間、皆さまもそうでしょうが、私は多くのことを学びました。それは、相互理解、不屈の精神、そして、生活状況が異なっていても可能な連帯や友人からの支援を喜ぶことです。ベラルーシでは今日、コロナウィルスの蔓延だけが原因ではなく、昨年の大統領選挙後の政情に関連して、厳しい状況が続いています。チェルノブイリ後に得た経験～隣人間の相互扶助、他国からの被災者への連帯、子ども達の健康回復への支援～は、正義を望むベラルーシ人を力づけています。

最後にもう一度、日本の友人や志を同じくする仲間の皆さんのご活躍、ご健康をお祈りいたします。皆さま方や親しい方々が、コロナウィルスに感染しませんように。コロナ禍が終わると、待ちに待った再会の時がやってきます。私は首を長くしてその時を待っています。

心からの愛と感謝を込めて。
ジャンナ　2020.02.13
（訳：竹内大樹）

【福島からのビデオメッセージ】

野口時子さん（郡山市　元≪3a！　安心・安全・アクションin郡山≫代表）

2019年4月に娘の佑芽さんと一緒に関西に来て、ふたりで原発事故当時のことを語ってくださった野口さん。今は「区切りがつかない」という思いが強いと言われました。

≪10年を振り返って≫

忘れるわけじゃないけど。中通りで普通に生活していると放射能のことも甲状腺検査のことも意識からなくなっている。まだ息子がいるから、夏になると保養どうしようかと意識にのぼるが。

震災直後は、郡山でも本当に線量が高くなり、私たちは一家で避難して、自分の子どもたちは初期被ばくからは守れたと思った。でも周りのお母さんたちは、引っ越すことも保養に出すこともできずに悩んでいた。何とかしたくて、なんで私がと思いつつまとめ役を引き受けて3aを立ち上げ、必死だった。すごい人数の人と出会ったけど、あっという間にその人たちもいなくなった。社会と関わったことのない私が、いろんなことを知り関わることになった。そういえば、春夏冬の休みに家族で過ごすことがない10年だった。子どもを保養に出したりして。

≪大丈夫、しかし≫

事故から10年が経過して子どもたちは成長した。甲状腺検査は、初めにA2（5.0mm以下の結節や20.0mm

以下ののう胞を認める）が出て、その後は異常なし。体は大丈夫。線量もだんだん下がっているが、ここに住んでいるので、これからの 10 年を思いやると、娘が結婚し出産するまでは大丈夫なのか…と思ってしまう。甲状腺検査についても、事故後の福島で子ども時代を過ごしても、福島県を出た娘は（指定された医療機関以外では）甲状腺検査は有料。放射能の影響を調べる検査や医療への支援ではなくて、子育て支援の枠で医療費支援をしている（福島県は 18 歳まで子育て支援として医療費は無料）。おかしいでしょ。

≪これから母になる世代のこと・保養は必要≫

やっぱり保養は必要と思う。当時、被ばくを避けるために私たち小学生の親はかなり頑張ったし、先生たちも協力してくれた。しかし、高校生は本当に被ばくに対して無防備だった。高い線量の中で部活も続けた。その子たちが親になって、新たに心配したり悩んだりしている。福島だけの問題ではない。この子たちがどのように考え、自分の置かれる境遇を受け止めることになるのか…

「洗濯物は今も外には干せてないんです。布団もガラス越しに日にあてて」と野口さんはちょっと笑って「普通に戻りつつあるんですよ。でも、私にとって、原発事故は孫を見るまでは区切りがつかない、かな」と締めくくられました。

岡洋子さん　（福島市に避難　≪浪江まち物語つたえ隊≫メンバー）

岡さんが住んでいた浪江町はまだ 80％が帰還困難区域。岡さんは住むことを諦めて福島市に住みつつ、改装して「オカフェ」と名付けた元の家に時々戻ってカフェを開き、近所の人々や県外から浪江を訪れた人々などに交流の場を提供している。

≪農家の嫁・できることからやろう≫

浪江町は一部帰還できるようになり、「戻れる人から戻ろう」となった。が、さて自分は？と考えると難しい。帰れなかった数年の間に故郷は変わってしまい、前の浪江町と同じではない。下を向いていたらダメ、できることからやろうと思いはしたが。ふと気が付くと被災後の浪江には「色がなかった」。人の暮らしの音がないのはもとより、鳥の声もなく風の音もなく、グレーの世界。涙が出た。しかし、数年前のある時、大平山で鳥の声を聴き、風景を見てああ色があると感じた。今まで見過ごしてきた自然を感じて、草木染を始めた。

≪紙芝居・多くの人とつながって≫

10 年前のあの時から困ったときに多くの知らない人たちと繋がって、紙芝居と出会って、助けられた。まだまだやれる。いただいた恩は返せないけど、次の他の人に恩を返したら、後悔しない生き方ができるのではないかと思うようになった。浪江町は農家の嫁として修業したところ。振り返ればそれがすべてのヒント。地域の人が教えてくれたこと、子どもを育て成長させてもらったことが、今生きる糧になっている。

「失ったものはたくさんある。でも、新しく得たものも多い」「当たり前の生活を失って初めて普通の生活が大事と痛感した。今は暮らしの大切さを見逃さないようにしたいと思う」「浪江に嫁いで農業と主婦を一生懸命にやった。浪江出身ではないけれど、子どもを育てることによって、自分にとっても故郷となった土地を離れるのはやはり辛いこと」「最後はやっぱり…浪江に帰りたい。やっぱり故郷だから…」

10 年経ってもまだ何も解決していないし、10 年は通過点でしかないと言われる岡さん。「帰りたいが帰れない」でも「私たちはまだまだやれますよ」とも。岡さんのお話はチェルノブイリ被災地の方々の思いと重なることが多くありました。

佐藤健太さん（飯舘村出身、福島市在住、村で家業を継ぎ毎日通う、村議会議員）

2019 年冬に来阪し、家業と村議の仕事のため飯舘村に通うが、小さな子どももいる家族そろっての帰還はやはり迷うと、複雑な思いを語ってくださった佐藤健太さん。でも、漆の栽培なども手掛けて、飯舘村の産業を興してゆく気概を見せてもらいました。

≪何も終わっていない≫

「これまでの 10 年はいろいろあったけれど、言えることはなにも終わっていないということです。通過点に過ぎないということです。」「それでも、これからの 10 年に飯舘村で何ができるか考えてゆきたい」と締めくくられた。

「早くコロナが収束し、対面でいろいろ活動を進めたいし、また大阪にも行きたいです」

里美喜生さん（いわき市湯本在住　旅館「古滝屋」16 代当主）

震災・原子力災害後、廃業の危機を乗り越え、被災地の現実を伝える活動を続けられています。

≪今言いたいことは人の温かみ≫

2011 年 3 月 11 日のあの日から失ったものは大きいが。今言いたいことは、遠い所である東北の地の震災と原発事故に、関西からも多くの人々が心配してくださったこと。人の温かみを感じたことです。国策の酷さと理不尽な被害の悔しさと対照的に、困ったときに差し伸べられる手。人々への感謝。阪神淡路大震災の経験（地獄絵図だったと思います）もあるのでしょうか。真っ先に心配してくれた関西の人が多かったように思います。直前に新潟の大地震があり新潟からも支援が届きました。10 年目の節目を迎えて、今考えることは、助けられたことに直接お返しはできないが、また何かで逃げなくてはならないときは、この福島に来てほしいと思います。

≪目に見えないものを失った≫

原子力災害のあった福島では、多くの目に見えないものをなくしました。何世代も続いてきた農家・生業・地域のつながり・歴史。直接的な放射能の被害と同じくらいの喪失。人々の営みが変わってしまいました。

≪原子力災害考証館≫

国の施設はいろいろ作られるが、そこに無いもの。原発事故の被害の事実、この喪失、この声なき声を、被害者の立場、住民の立場で伝えるために古滝屋に「考証館」を開館します。水素爆発の日を忘れてはいけないと、3 月 12 日をオープン日にしました。コロナが落ち着いたら、ぜひ福島へ、ぜひいわきへ、ぜひ古滝屋へ足を運んでください。

佐藤努さん　（楢葉町から千葉へ避難後、現在いわき市在住・介護福祉士）

2011 年 12 月には、避難先の千葉から関西に来て、被災体験を語っていただきました。またギターを片手に自作の歌も歌っていただきました。「この 10 年を振り返り、あまりいい思い出はないです。家族は千葉からいわき市へ移り生活しています。」と、照れたように笑いながら、考え考え話してくださいました。

≪楢葉町に帰る≫

今は、私自身は、楢葉町に戻って生活したいと考えているところです。考えてはいますが、不安だらけです。避難したところも、移住した先もそれなりになんとか暮らして

きたが、思うところがいろいろあります。
10年経って。浜通りの厳しい状況を踏まえても、「思うところがあり」　帰ることについて、離れてみて、育った楢葉町がよかったと思っている自分に気づいたことや、特に意識せずに包まれてきた楢葉町の中での地域のつながりや思いやりのことも話されていました。
「浜通りを温かく見守ってください。」

佐藤龍彦さん　（2016年 楢葉町に帰還。'18年にチェルノブイリ被災地訪問・元郵便労働者）

≪未曽有の被害をもたらした事故の責任は国にある≫

刑事裁判でも争われ、国の責任が争点になっている。原発事故の責任は国と東京電力にあるとの世論の認識は揺るがない。未曽有の被害は、直接死のみならず、関連死・要介護者の増加にも表われ、公然と「社会的殺人」が継続しているが、責任をとるものがいない。

≪『健康手帳』の交付≫

原発事故被害の全ては、事故による放射能に起因する。健康影響への懸念は消えるえることはない。被ばくを受け、受け続けている事実を認めさせ、国の責任で交付される「健康手帳」が必要。保障、権利としての恒久的医療費の無料化支援は被害者にとって「命綱」である

≪フクシマの悲劇を繰り返させない≫

原発再稼働反対は、破壊された実相からの共通する被災者の要求である、世論の力で東電福島第二原発の廃炉を実現した教訓を活かし、全国、全世界へ「フクシマの悲劇」を繰り返させない誓いのメッセージを発信する義務がある。

≪チェルノブイリ被害者とのフクシマ被害者との連帯≫

核被害者の実相、告発こそが、「核と人類は共存できない」という普遍の声である。被害の実相は遠くチェルノブイリの核被害者（ヒバクシャ）と連帯する意義を教えた。ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ、ノーモア・チェルノブイリ、ノーモア・フクシマの意味する叫びを理解しようではないか

≪これ以上の核被害を繰り返さないための闘い≫

１０年は、人間の復興、心の復興の通過点に過ぎない。被害者ひとりひとりに滓となって残る原発事故を忘れることはできない。被害からの再生・復興は道半ば、廃炉に携わる労働者や、苦渋が続く生活再建（避難者、生産者など）、健康（安全、安心）課題の闘いは緒に就いたばかりである。

峠三吉の原爆詩集を思い出す。

ちちをかえせ
ははをかえせ
としよりをかえせ
こどもをかえせ
わたしをかえせ　わたしにつながる にんげんをかえせ
…へいわをかえせ

「１０年」は闘いのスタートに過ぎない。
多くの人々との連帯が、わたしたちの福島の運動の支えになってきたことを実感している。
ともに生き続け、闘い続けましょう。

「ご縁」は突然に、「絆」は大切に：ある学生通訳ボランティアの雑感

「光陰矢の如し」とはよく言ったもので、救援関西の活動に関わるようになってから、今年３月でかれこれ5年が経とうとしている。もうそんなになるのかと自分でも驚くが、学生が本業で「仙人」のような（事実大学は六甲山麓に位置する）生活をしていると、「俗世」の時の流れの速さから乖離している感は否めない。

救援関西の活動に関与するきっかけとなったのは、モスクワでの語学留学から帰国して半年が経過した 2016年３月の「ジャンナさん来日」であった。学部時代の第二外国語（ロシア語）の恩師から頂いたご縁によりFacebookで繋がっていた松川直子さん（救援関西通訳スタッフ）から、ある日突然「ベラルーシから講演のため来日される方のアテンドをして欲しい」というメッセージが届いたのである。ロシアで数々の「修羅場」をくぐり抜けてきたこともあり、「まぁなんとかなるやろ」と一応楽観的に構えていたが、通訳・アテンドについては「ズブの素人」で、ましてロシア語を専門的に学んできたわけではないので、サバイバルに特化した「野生のロシア語」で対応できるかどうか、一抹の不安があるにはあった。

今思うとやはり非常に拙いアテンドだったし、今でも時折思い出して恥じ入ることもある。「一枚目のブリヌィ（ロシア風クレープ）はいつも失敗する«*Первый блин - всегда комом*»」というロシアの格言そのままでであったと言える。しかし同時に、確固たる「手応え」を感じたことも事実であり、ちょうどそこで、今日まで救援関西の活動に参加する強いインセンティヴが形成されたように思われる。それは果たしてなぜだろうか？ー 色々と考えを巡らせると、やはり自分が少なくとも異文化間コミュニケーションにおける「かすがい」の役割を果たすことができたという自負に他ならないだろう。公的な場面ーカンファレンス等ーでの通訳も重要な仕事だが（今日でも自分には荷が重いと感じる）、同時に私的な場面ー寝食を共にし、「日本のおばちゃん」と「ベラルーシのおばちゃん」との仲を取り持つなどーでの「絆」を深めるお手伝いも、「連帯」がキーワードとなる社会運動では特に重要な意味を持つのではなかろうか。そう考えると格言を引用し言い訳をすることはなかったのだ。

今年 2021 年は、福島第一原発事故発生から 10 年、チェルノブイリ原発事故発生から 35 年の歳月が経過した「節目の年」であるが、「コロナ禍」の影響により、残念ながらジャンナさんの来日、そして我々のベラルーシへの渡航は望むべくもない。昨年３月末には、「振津御一行様」の通訳要員としてベラルーシに発ち、首都ミンスクのマリノフカでジャンナさんと感動の再会を果たすことを目論んでいたのだが、泣く泣くキャンセルせざるを得なくなった。このように、昨今は「顔の見える繋がり」が薄くなってしまったが、大阪ーミンスクの「絆」は途切れることなく、むしろ SNS を活用して着実に育まれていると感じる。今年２月に大阪で「救援関西発足 29 周年」を記念する集会を行った際には、ジャンナさんより非常に励まされる連帯のメッセージを頂いた。その拙訳は、このジュラーヴリに掲載されていると思うので、是非ご一読頂きたい。集会前日の深夜に SNS 経由で受け取り、ジャンナさんに頼まれて急ぎ翻訳をする中で、胸の中に込み上げてくる熱いものを感じた。もはや、単なるボランティアではなく、救援関西の一員なのだと。

大阪ーミンスクの「絆」は一朝一夕に生じたものではなく、両国の「おばちゃん」たちの弛まぬ努力の結晶であることは、贅言を要しないだろう。自分は先達の方々のように、様々な活動に深くコミットしてきたわけではない。しかし、頂いた「ご縁」ー特にジャンナさんとの出会いーを大切に、そして今後も両国の「おばちゃん」たちが築いてきた「絆」を絶やさないように、力を尽くしていこうと考えている。

竹内大樹

【３．１１フクシマ事故10年を迎えて】

2021　さよなら原発　関西アクションー 原発やめて！　核燃料サイクル中止 ー

去年はコロナ感染拡大で中止となりましたが、今年は昨年と同一プログラム、３月 7 日エルおおさかホール550名参加で**関西アクション**が開催されました。

集会前半は原発・核燃現地からの報告。

福井から来られた宮下さんは、「中間貯蔵が決まらねば再稼働議論の入り口にも立てぬ」と言っていた福井県知事が、この問題を切り離して県議会で原発再稼働を議論すると変節したので、「関西からも知事と県議会議長に抗議を！ 今が私達の生命の安全の瀬戸際」と訴えられた。（救援関西も抗議文を提出。反対意見・抗議のせいで今県議会では議論せずとなったが、今後は予断を許さない）

福島からは武藤類子さん。「あったはずの時間を失い、違った10年を過ごしてきた」と話し始め、**「フクシマの今」**を語ってくださった。

原発サイトで新たに高線量区域が見つかり、より一層廃炉が遠のいたが、一方、盛んに見学者を受け入れており、建屋が見える見学台は毎時100μSvの汚染。高校生も訪れている。年間20mSv基準の帰還は進まず、避難者の統計も不確か。震災関連死も増えている。

ひとたび放射能が環境中に出たら取り返しがつかない上に、トリチウム汚染水（ALPS処理水）の海洋放出、、汚染土の利用、汚染木材を燃やすバイオマス発電など新たな放射性物質の拡散が画策されている。

また、裁判で多くのことが明らかになった。大津波の可能性を警告されていたのに対策を先送りしたのは犯罪、「裁判所は正義の場所であってほしい」この痛切な言葉に司法はどう応えるか？！

武藤さんは「10年は重たい時間、しかし、原発事故を体験した大人として若い人達に安全な地球を残したい」と決意を述べられた。

青森から来られた佐原若子さんは**「六ケ所再処理の中止を」**訴えた。青森県や福島県は食糧自給率100%を超え日本の台所とも言える。その豊かな土地に核施設を林立させるとは！

「推進派は10年に１度くらい事故が起こっても構わないと思っている」「再処理工場はアクティブ試験をしたから、放射能汚染してしまった」と悲憤やるかたない述懐。「戦争と核は絶対悪」「青森県民は死んでもいいと思われている。私は生きてやる！」とも。かなり直情的な言葉が続く。

武藤さんと佐原さん、語り口は対照的だけど、お二人の内なるエネルギーは共鳴している。降りかかった原子力災害に向き合い、将来世代のために今自分ができることをやり続ける決意。チェルノブイリ被災地で出会った人々と同じ気概を感じた。こんな方々からエネルギーをもらうのも集会の醍醐味。こういう感受はやっぱりZoomじゃ無理かもしれない。（とアナログ派田中は思った）

後半の**樋口英明さん（弁護士　元裁判長）講演「原発を止める責任」**は、原発の危険性について、まず事故発生の確率と被害の大きさという観点から述べ始められた。「地震国での原発事故発生の確率は無視できない。そして事故が起こった場合、莫大な現在的将来的被害がのしかかってくる」

次に、原発の原理を説明しながら、福島第一原発の事故に言及。この事故は数々の奇跡とも言える偶然によって最悪の事態を免れることができた。そして話は原発の基準地震動におよび、「各原発の基準地震動はハウスメーカーの一般住宅の耐震基準にもはるかに見劣りするレベル」

結論は、「これ程に危険な原発を止められない裁判所はおかしい」と喝破。

現在原発関連で多くの裁判が行われているが、「これがあの福島第一原発事故を経た『今』の判決か？！」と驚き呆れる場合と、昔は連敗続きだった裁判も時には「勝訴」と旗出しできる判決が増えてきたことを思えば、粘り強いアクションがいずれ実を結ぶと信じて…　デモに出〜発！　大声のコールはなしで西梅田まで歩きました。　（あとで階段降りるとき膝が痛くなった　たなかでした）

【報告】2021 原発のない福島を！県民大集会

10年の運動の成果を確認し、生活・健康を守り、事故を繰り返させない、新たな10年に向けスタート

３月２１日、福島市「とうほう・みんなの文化センター」で「2021 原発のない福島を！県民大集会」がオンライン・ライブ配信と並行して開催されました。感染予防のために各団体代表の県内参加に限り、主催者発表７０名と会場参加は少人数でした。しかし、原発事故１０年の節目に、国と東電の責任を改めて問い、三つの「集会指標」（別記囲み）実現を確認し、生産者を含む呼びかけ人、被災自治体の後援、県内外の多くの団体の賛同を得て、これまでの運動の上に今年の「県民大集会」が開催された意義は大きく、今後の運動に繋がります。

集会は、大震災と原発事故によって亡くなった方々への黙祷で始まりました。そして、実行委員長の角田さんが挨拶し「１０年を振り返り、運動の役割を共有し、課題が残る福島の現状を発信し、新たな１０年に向けての運動をスタートさせよう…被災者の生活再建、健康補償の継続は、国と東電の責任。再び原発事故を起こさせないために、原発のない福島、原発のない社会をつくっていきましょう。」と力強く訴えました。また、「国は事故を隠蔽し、放射能被害は無くなったかのようにリスクコミュニケーションを強化している。『新たな安全神話』だ。汚染土を公共事業に使う実証実験、除染なしの帰還困難区域解除計画、復興・創成期間後の医療費無料化見直し、生活保障や賠償の打ち切りを進めている。廃炉作業は計画通りに進まず、シールドプラグの高濃度汚染なども明らかになり『４０〜５０年で廃炉』は机上の計画。福島のリスクはこれからも続く。」と述べました。

浪江町で帰還困難区域となった津島地区から福島市に避難している酪農家の三瓶さんは「事業がやっとこれからという時に原発事故で避難を強いられた。故郷を捨てたのではない。追い出されたのだ。100 年帰れないと国からも説明を受け、先の見えない日々を送っている。後世にきれいな故郷を残してほしい。」と訴えました。また、「健康不安」の中で子どもたちと向かい合ってきた小学校教員の菊池さんは、「国は知識がないから不安になると、住民に問題があるように言う。リスクコミュニケーション戦略で冊子『放射能のホント』を発行し『健康影響は出るとはいえない』というのは『新たな安全神話』。事故から１０年、小学校３年生以下は震災後に生まれた世代。原発事故が『歴史の出来事』にされようとしている。福島市でも事故前の平均２倍以上の線量があり、年１mSv を超えるところもある。現場は多忙を極めているが、放射線教育を続けたい。」と述べました。事故当時、まだ小学生だった高校生平和大使は、「平和大使になって広島・長崎を訪問し、『核と人類は共存できない』と確信した。福島では今も故郷に帰れない人がいる。二度と繰り返さない、後世の人々に同じ思いをさせない。そのためにフクシマのことを伝えたい。」と語りました。

【集会指標】二度と福島の悲劇を繰り返さないよう、私たちは訴えます！

1. **福島を忘れないよう、私たちは発信します！**

○ 東京電力福島第一原子力発電所および第二原子力発電所の安全かつ着実な廃炉を求めるとともに、福島県を再生可能エネルギーの研究・開発および自立的な実施拠点とすること。

○放射能によって奪われた福島県の安全・安心を回復し、県民の健康、とりわけ子どもたちの健やかな成長を長期にわたって保障すること。

○原発事故に伴う被害への賠償および被災者の生活再建支援を、国と東京電力は最後まで責任持って行うこと。

「集会の指標の実現には、相当な時間を要します。これからも、生活再建の営みを続け、再生可能エネルギーの発展を促しつつ、国と東京電力に、事故の責任を果たすよう強く求めていかなければなりません。それは、この悲惨な経験をくぐった私たち福島県民の歴史的な使命とも言えます。安心して住むことのできる福島を取り戻すために、真の『原発のない福島を』めざし、力を合わせていきましょう。」と呼びかけるアピールを採択しました。

（ふりつ）

ベラルーシのチェルノブイリ汚染地からの「移住者の会」

代表 ジャンナ・フィロメンコさんより フクシマ原発事故１０周年に寄せられたメッセージ

2021年３月９日

日本の皆さま、福島原発事故被害者の皆さま

原発事故の忌まわしい記念日がまた巡ってきます。チェルノブイリ事故被害者の心からの共感と連帯の言葉をお受け取りください。

浪江町/馬場町長を訪問（2016年）

2021年、ここベラルーシではチェルノブイリ原発事故から35年、日本では福島原発事故から10年が経過しました。この年月は長い時間だったのでしょうか、それとも大した時間ではなかったのでしょうか。おそらく地球的には「大した時間ではない」と言えるでしょう。しかしながら、予期せぬ望みもしない事故が日常生活を変貌させ、個人や多くの家族の運命を大きく変えてしまったとしたら、やはりとても「長い時間が流れた」ということになるでしょう。

原発事故はベラルーシそして日本において、多くの人々の生活を豹変させました。広大な土地が放射能で汚染され、住み慣れた家を後にしなくてはならなかった多くの被害者。長年の伝統が途絶え、日々の当たり前の生活が壊されました。ばらばらの土地への移住を余儀なくされ、親戚や友人たちとの絆が断ち切られてしまいました。大多数が、生業を失い、職業を変えざるをえませんでした。それに、事故の被害者は常に自分の健康、愛する人達の健康を心配し続けなければなりません。

被災者たちは、事故の後ずっと原発事故前の様々な思い出や、事故後の辛い出来事の数々を克明に覚えていて、その記憶は消えることはなく私達に付きまといます。それは辛い、とても厳しいことです。被災者たちに思いを寄せてくださる方々の温情に感謝しつつも、月日が経ってなお、心の痛みや別離を強いられた故郷への思いは断ち難いものです。

第１回国際シンポジウム（2016 年）

しかし否応なく人生は続きます。私達の息子や娘は大人になり、すでに孫たちも育っています。

私たちベラルーシそして日本の原子力の被害者は、たとえどんなに辛くとも、原発事故のあと自分や家族に何があったかを伝え続けましょう。原発事故によってもたらされる長期的な被害がどんなものなのか、また、原発の近辺だけではなく遠方の人々の生活までも取り返しがつかないほどに変貌させてしまう災厄であるということを、世界中の人々に知らせるために。そして、なによりも若い世代に、私たちの悲しい経験、自分の過去を伝えなくてはなりません。これからの人類は「核の平和利用」や核兵器から安全でなくてはならないのです。

親愛なる日本の友人の皆様！

春がやってきました。日本では、すでに桜が咲いていることでしょう。ベラルーシでは、まだ雪が積もっており、川も凍っています。しかし、春の訪れは着実に近づいています。自然の目覚めが、私たちの心や家族に温もりを与えてくれますように。誰もが原子力からもコロナ・ウイルスからも被害を受けることがありませんように。そして、昨年は延期せざるを得なかった「再会」が一日も早く実現することを心待ちにしています。

人生は続きます。ともに命と暮らしを守ってゆきましょう。

（訳：竹内大樹）

～遺言　第六章　サマショール～　　　監督「豊田直己」

久保　きよ子

振津さんからの緊急のお知らせで、３月６日　大阪十三第７劇場で、鑑賞しました。

「サマショール」とは、１９８６年チェルノブイリ原発重大事故により立ち入り禁止地域になった故郷に自主帰還したり、移住を拒んで住み続けた人々のことで、日本語訳では「頑固者」とも、呼ばれているのです。

この映画は福島県の飯舘村で元酪農家を営んでおられた長谷川健一さんを中心に汚染された大地で「放射能と共育」を強いられる生活を追い続けるドキュメンタリー映画でした。

今も汚染され続けている故郷で生活をせざるを得ない大いなる矛盾を腹に収めながら、100 年後、200 年後には、子孫が戻れるかもしれないという希望を胸に、その日のために今日もまた広大な大地に蕎麦の種をまいていく。

その覚悟を決めた彼の姿が、鑑賞する私たちに何かを訴えてかけてくるのです。

「原発なんかに負けてたまる」かと！

彼の仲間、一緒に酪農を営んできた仲間が、原発事故によってすべてを奪われた酪農仲間が、命を落とさねばならなかった。

仲間の無念さを背負いながら、「仲間の遺言」として立ち上がる彼の姿が、映像をさらに、さらに大きく輝かせてくれるのです。もう一度鑑賞したいものです。

コロナ禍でも、みんなの力を集めて

「戦争はいやや！核なんかいらへん！反核フェステイバル」

が開かれました！

久保　きよ子

毎年長居公園で開催されていた「反核フェス」、今年はコロナ禍の影響で、屋内集会となりました。昨年の 10 月 13 日　大阪市平野区市民センターで開催されました。

昨年（2020 年）は、ヒロシマ・ナガサキ原爆投下から 75 年の大きな節目を迎えました。
例年と開催場所は違えど、屋内で何とか出来たので、ホッとしました。ただ、代表の山科和子さんはご高齢のためコロナ禍で、参加できないのが本当に残念でした。

毎年出演していただいているダンス・コアポッシブルの創作バレエ「死んだ男の残したものは！」の発表は、狭い空間にもかかわらず、迫力ある力強い演技に感銘を受けました。お礼申し上げます。

また、沖縄の歌は何度聞いても心打たれます。バンド演奏の合間に各グループからのアピールは、長いものもあり、短いものもあり、改めて社会の矛盾を感じさせられ、振り返ることができました。

特に印象に残ったアピールは、立憲民主党の尾辻国会議員のアピールでした。維新の会、と公明党が大阪で押し進めようとしている「大阪都構想」とは、大阪市の人々の生活をよくするものでなく、府の権限を強めて、大阪市の権限を弱める悪意ある政策であると暴露されたのが印象的でした。

いまだにコロナの終息はままならない今年は、どうするのか、難しい判断が迫られそうですが、可能な形で是非開催してほしいものです。

会計報告（2020.1．1～2020．12.31）

***チェルノブリ支援（「子ども元気キャンペーン」を含む）**

収入	カンパ	415,700
支出		0
繰り越し		351,353
現在高		767,053

＊ベラルーシ保養支援

収入	カンパ	18,500
支出		0
繰り越し		198,496
現在高		216,996

＊フクシマ支援

収入	カンパ	267,000
支出		0
繰り越し		107,332
現在高		374,332

＊運営会計

収入	会費・カンパ	177,000
支出	送料、紙・印刷代、賛同金等	191,260
差し引き		−14,260
繰り越し		80,664
現在高		66,404

2020年はコロナ禍のために、残念ながらチェルノブイリ、フクシマの方々との直接の交流、支援を断念せざるを得ませんでした。今年はコロナ禍が落ち着き、また訪問、招待などの直接の交流・支援が再開できることを期待しています。

カンパ・会費の納入ありがとうございました！

（2020.10.3~2021.3.30）

ダンスコアポシブル　田原良二　戸張あかり　野中マサ子　染木冨美代　藤田達　神崎加代子　稲田みどり　福山義和　堀田美恵子　大平文昭　田川克孝　金子龍太郎　大野ひろ子　加堂妙子　安田美津子　小林まゆみ　長谷川育子　原発の危険性を考える宝塚の会　衛藤英二　旦保立子　福岡いさ子　富田洋香　長沢由美　吉崎恵美子　石地優　川原重信　中山一郎　森本良子　末田一秀　東野セツ　振津かつみ　木下俊子　崎山昇　伊賀上菜穂　稲田多恵子　北田万寿夫　三田宜充　アカリトバリ　山崎知行　伊藤雅夫　原発の危険性を考える宝塚の会　田中章子　木村英子　　（順不同・敬称略）

今年初めてのジュラーヴリをお届けします！

～これからもご支援・ご協力をよろしくお願いいたします！～

桜は満開。菜の花、芝桜が競い、タンポポが鮮やか！まさに春爛漫です。ビックリするほど早く菜の花が咲いたりと、今年は2月が暖かったために植物もせかされたのでしょうか。寒暖の差が大きい季節でした。これからだんだんと季節の変わり目が分かりづらくなるのでしょうか。

また新型コロナウイルスの感染者が増加傾向にあり第４波が心配されています。やはり活動は制限されざるを得ませんが、その中でも、できることを積み重ねていきたいと思います。皆さまの変わらぬご支援とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

今回も大部になってしまいましたが、気の向くところからお読みいただけたら幸いです。

＝目次＝

Ｐ１・・・チェルノブリ事故35周年の集い～フクシマ10年と結んで

Ｐ３・・・「救援関西」発足29周年の集い～ヒロシマ・ナガサキ75年　ヒバクシャの思いをつなぐ

Ｐ３・・参加報告

Ｐ４・・事務局報告　ヒロシマ・ナガサキ75年からチェルノブリ35年、フクシマ10年に向けて

Ｐ６・・長崎被爆者山科さんの思い～語り継ぐのが私の使命

Ｐ１０・・チェルノブリからのメッセージ

Ｐ１５・・福島からのメッセージ

Ｐ１９・・ある学生ボランティアの雑感　「ご縁」は突然に、「絆」は大切に

Ｐ２０・・・３．１１フクシマ事故10年を迎えて

Ｐ２０・・2021 さよなら 原発関西アクション一原発止めて！ 核燃サイクル中止一

Ｐ２１・・2021 原発のない福島を！ 県民大集会

Ｐ２２・・ベラルーシの「移住者の会」代表ジャンナ・フィロメンコさんよりフクシマ事故10年に寄せられたメッセージ

Ｐ２３・・映画「遺言　６章 サマショール」を見て

Ｐ２４・・・戦争はいやや！ 核なんかいらへん！ 反核フェスティバルが開かれました！

Ｐ２５・・・会計報告

Ｐ２６・・・目次

ニュース発行:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

連絡先:〒591-8021　堺市北区新金岡町 1-3-15-102　猪又方

Tel：072-253－4644

e-mail: cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

郵便振替：00910-2-32752

口座名 :チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西